

全学共通科目（後期）「ジェンダー論」開講

落合 恵美子教授の全学共通科目「ジェンダー論」が10月7日（月）より開講しました。現代日本のジェンダーを広い視野に位置付けて理解し、問題解決の方法について自ら考える力を養うことを目指します。

適宜ゲストスピーカーをお招きし、さまざまな研究分野においてジェンダーが開くパースペクティブ、日本および世界の他の地域のジェンダーの状況や課題について講義いただきます。



2019 年度 10 月開講 全学共通科目（後期）
「ジェンダー論」テーマ一覧

講義日	テ ー マ
10 月 7 日	日本の子育てはなぜ難しいのか
10 月 16 日	伝統を問い直す：二つのアジア
10 月 21 日	近代家族とジェンダー
10 月 28 日	家族の戦後体制は終わったか
11 月 6 日	ハイジと日本
11 月 11 日	女性医師／医学研究者として生きる：多様性の中の一事例
11 月 18 日	男女雇用機会均等法・育児介護休業法・女性活躍推進法
12 月 2 日	性的同意
12 月 9 日	女性の貧困
12 月 16 日	男性学とは何か
12 月 23 日	ジェンダー平等と父親の育児休業の国際比較
1 月 6 日	男性のワーク・ライフ・バランス
1 月 14 日	慰安婦と中国
1 月 20 日	まとめ

■ゼミの時間：月曜日 3 限（13 時 00 分～14 時 30 分）

■ゼミの場所：吉田南構内 国際高等教育院棟 31



みんな どうしてる？

シッターサービスを使ってみた

筆者は最初は夫と大阪在住の両親の助けを借りながら子育てと仕事を両立していた。保育園は私の職場及び自宅の近くにあり、他方夫の職場からは1時間弱かかるため、平日の送迎は私の担当、週末は夫が担当となることが多かった。しかし、息子が年少のときに母が緊急入院し、父は衰え介護が必要になり、負担は一人娘の私にかかった。初めて仕事を辞めようかという考えが頭をよぎった。幸い職場からサポートをいただいて乗り切ることができたが、通常業務に復帰するにあたって、保育のバックアップは必須と考え、同じ職場の人から情報を集めシッターサービスをお願いすることにした。他人を自宅にいれることに対する抵抗感は、「これがないと仕事が続けられない」という切羽詰まった状況によってあっさり消えた。

最初は、シッターサービス業者とのやり取り、初めてのシッターさんと息子との引き合わせ、など様々な打ち合わせがあり、実際に息子を長い時間お願いできるまでに1か月弱はかかった。幸い最初のシッターさんには早く慣れてくれたのでほっとした。

会議や研究打合せなどの会合は主に夕方に入るときが多い。部内の会合は可能な限り日中に行うよう変更を行ったが、夕方から動かせない会合があったり週末には研究会や学会があって、夫の出張や会議と重なるときがある。そんなとき、シッターさんにお世話になった。シッターさんのおかげで、予定よりも遅く帰ってきた夫に腹を立てることもなくなった。

息子が小学校に上がると、学童保育が6時半お迎え、にも関わらず夫・私共に時間外の業務が増え、週に1・2回はシッターさんお迎え～自宅での親の帰りを待ってもらうパターンが3年ほど続いた。1回につき最低3時間以上、時給2,000円程度（夜間は加算あり）。ご飯が用意できなかった時はコンビニでおにぎりを買ってもらい、シッターさ

んの交通費もあるので1回7千～1万円程度、月に4～5万円分をシッター代として使っていた。夫婦のどちらかが泊まりがけ出張の場合は夫婦でカバーできない時間が増えるため数日間続けての依頼となり、さらに数万上乗せ状態であった。最近は息子が高学年になり、シッターさんがいなくても短時間なら一人でやっていけるようになり、また習い事で忙しかったためシッターさんを頼むことはなくなった。

センターのおむかえ保育（脚注1）も選択肢ではあったが、私の場合は保育園と自宅の位置関係からは、センターを経由する分タイムロスが大きくなりそうだった。共稼ぎ家庭においては時間は貴重であり、諸要素を考えてベストな選択をした結果が私の場合はシッターサービスの利用となった。シッター業者に制限があったが、クーポンが利用できた（脚注2）。ただ、シッターサービスに関する金銭的補助は、決して十分とはいえない。仕事を続けていくために一時的とは言えかなりの出費を覚悟する必要がある、その点について夫とはいろいろと話し合った。

最後にひとこと、夕方を過ぎる会合や研究会では、予定している時間を延長しないでいただきたい。ギリギリの時間までシッターさんをお願いして会に参加しているのに、長引いてしまって残念ながら中座しなければならなかった経験が何度かあった。もちろん、延長可能なシッターを私の代わりに手配してくれて代金も負担してくれるというのなら話は別だが。

（脚注1）おむかえ保育は、保護者に代わってシッターが保育園までお迎えに行き、センターで一時保育を行う制度です。学生も利用できます。<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/support/care/proxy/>

（脚注2）ベビーシッター利用育児支援は、クーポンを発行してベビーシッターによる在宅保育サービスの利用料金の一部を助成する制度です。学生は利用できません。<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/support/care/babysitter/>

コラム「みんな どうしてる？」バックナンバー <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/column/mina/>

（文責 育児介護支援事業 WG、専用アドレス：ikwg@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp）

電通×京大 SDGs シンポジウム

7月25日（木）10時より、大阪科学技術センターにおいて企業向けの「電通×京大 SDGs シンポジウム」が開催されました。その中の「JAMセッション 京都大学の挑戦」では、広報・相談・社会連携事業 WG 主査である今村 博臣准教授が、京都大学における男女共同参画の取り組みについて講演しました。女子学生・研究員を増やす取り組みとして、男女共同参画推進センターに関して、4つのワーキンググループの活動を中心に紹介

しました。センターのことを紹介できる機会を得たことは社会にアピールすることであり、今後も引き続き発信していきたいと考えています。



「多様性をイノベーションに繋ぐ要因の研究と新たな評価法の提案」に関する研究開発専門委員会

7月30日（火）11時より京都大学杉浦ホールにて、日本学術振興会「多様性をイノベーションに繋ぐ要因の研究と新たな評価法の提案」に関する研究開発専門委員会（通称：多様性イノベ委員会）（委員長：鈴木 和代 医学部附属病院特定助教）の研究会が行われました。

多様性イノベ委員会では、これまでにイノベーションに寄与した女性研究者・技術者へのインタビュー調査を通じて共通したイノベーション寄与要因を質的に解析し、その寄与要因を指標化することで多様な人材の能力を生かす多角的な仕組みと透明性のある評価制度の実現を目指しています。

今回の研究会では、はじめに、スギホールディングスの副会長である杉浦 昭子氏が「スギホールディングス

の多様性をイノベーションに繋ぐ取り組み」と題して講演を行われました。その後、鈴木特定助教が「多様性イノベ委員会のこれまでの進捗」について報告しました。午後からは、要因のイノベーションへの寄与度に関する分析・ルーブリック作成ワークショップが行われ、その後新たな評価法について活発な意見交換がなされました。



人杜未来型ユニット 第2回全学シンポジウム 女性がつくるアジア人文学

8月23日（金）13時より、国際科学イノベーション棟シンポジウムホールにて「人杜未来型ユニット第2回全学シンポジウム 女性がつくるアジア人文学」が開催されました。これは、大学で研究・教育に携わる女性たちが集まり、アジアの現代社会に潜むジェンダー関連の諸問題を明るみに出し、分析することを目的としたシンポジウムです。はじめに、稲葉 カヨセンター長、理事・副学長より挨拶がありました。その後、第一部のアジアの女性研究者による講演では、金 恵淑梨花女子大学総長、三成 美保



奈良女子大学副学長、落合 恵美子文学研究科教授、教育学研究科博士後期課程大学院生の西郷 南海子氏が、それぞれのテーマについて話されました。第二部の提題者とコメンテーターによる総合討論では、家族と大学を生きる女性研究者の視点から様々な意見が交わされ、盛会に終了しました。



みんなどうする？保活情報交換会

9月27日（金）12時より、男女共同参画推進センター会議室にて育児・介護支援ワーキンググループ主催の「みんなどうする？保活情報交換会」が初めて開催されました。これは、来年4月入所を目指す方やその他研究者の保活（子どもを保育園に入れるための活動）に関心を寄せる方のために企画されたイベントです。はじめに、ワーキンググループ主査である矢野 孝次理学研究科准教授より挨拶がありました。次に齊藤 真紀法学研究科教授が、保育園入園のタイミングや見学について、また京都市のポイント制の概



要等について話しました。その後、自由な意見交換や質問の時間をもち、就労証明書や申込書の書き方のポイント等、保育園に入園するための手立てについて活発な情報交換が行われ、充実した交流会となりました。



京都大学女性教員懇話会ランチ会

9月2日（月）12時より、吉田泉殿にて京都大学女性教員懇話会のランチ会がありました。

今回は、決まった講演やミニセミナーなどは行わず、自由に育児や介護、今般の女性問題等について、思い思いに意見交換を行いました。

稲葉 カヨセンター長、理事・副学長にも参加していただき、短時間ではありましたが、意見が飛び交い、参考になったことや知らなかったことについての認識等で盛り上がりました。



連載：研究者になる！第14回

アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授 中村 沙絵

●何でも挑戦する学生時代

父親の転勤で、中学時代に住んでいたインドネシア。スハルト政権が倒れた時期で、大規模な暴動などを経験し、広く世の中の仕組みのことや、自分とは違う生活をおくる人々の考えや生き方に興味を持ったことが研究者を目指すことへの始まりでした。運動も音楽もボランティア活動もしたい！と欲張りな私は、学生時代、女子サッカー部やサンバサークル、大学外の NGO など課外活動に多くの時間を費やしました。NGO での活動を通して津波復興支援の一環でスリランカを訪問したことがきっかけで、後にスリランカの全てに魅了され、スリランカ研究で進学することになるのです。

●様々な出会いが今に繋がっている

学生時代、忘れられない様々な出会いがありました。胡瓜の光合成をはじめ、植物の素晴らしさを教えてくれる生物学の先生、聖書をジェンダーの視点で読む先生。2人の先生の授業はとにかく興味深く感心することばかりで、何かを追求することはこんなにも素晴らしいことなんだと感じさせられました。また「私もいつかこんな本を書いてみたい」と思うほど感動した民族誌との出会いもあり、いつの日か研究者を目指す自分がいました。

大いに影響を受けることになったスリランカ訪問では、スリランカの人、食べ物、風景、いろんなものに魅せられました。スリランカにまた行きたいという思いと、自分も少し関わっていた津波復興支援についてもう少し考えてみたいという思いから再訪問しました。そこで、とある老夫婦に出会い、みずばらしい格好をしている私に声をかけてくれました。シャワー、トイレ付きの部屋を用意してもらい、なんと毎日の食事までお世話になることに。いつも私のことを気にかけて、本当の両親のように親切にしてもらいました。かけがえのない出会いとなり、私自身も彼らのことを「お父さん、お母さん」と呼ぶようになっていました。私にとってその方々との出会いが大きく、「この人たちのことをもっと知りたい」と素直に思うようになりました。そこから、高齢者について研究し、老人ホームの民族誌を書くことに至りました。

出産・育児を経て、卒業できるかどうか分からない状況の時もありました。産後は所属もなく保活に苦労し、ようやく保育園に預けられるようになったのは息子が2歳のときでした。その間は、両親にみてもらったり、就寝後の時間を使うなどして「とにかく、本だけ出せればそれでいい。研究者になれなくてもいい」と思って博論を書いていました。京大の大学院（ASAFAS）の

先生方が支援してくださり、何とか研究者の道を諦めずに来られました。自身の著書を出すことができ、強い意志を持って続けてきてよかった、と今心から感じています。

現在は、スリランカをはじめとする南アジア地域の老い・病い・死とケアをめぐる問題を研究しています。地域のことを相対的・総合的に見て、生態系や地理的な特徴、文化的な特性、社会構造等がどのように関係しているのかという地域研究の視点と、文化をもっている人間の社会的・文化的側面を追求する文化人類学の視点から研究を進めています。

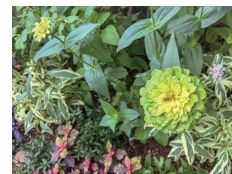
●調査に協力してくださった方々のためにも、意義のある研究を

私が心がけていることは、とにかく、現地の人たちに教えてもらったことを一つ一つ大事に理解し、文字にし、忠実に伝えること。遠回りだったとしても、調査に協力してくれた人たちに何らかの意義ある仕事をする。現地で調査に協力してくれている人たちにとっても、私にとっても、学術的にも大事な問題を探し続けるようにしています。そして、まずは単著を英語にして現地の人たちに還元したい、と考えています。その後はもう一度、長期のフィールドワークをしたいです。

裁量労働なので、子育てもしやすい環境ではありますが、平日のお迎え時間までにできることが限られていて、休日や夜間（子供を寝かした後）などに仕事が集中してしまうこともあります。これが続くと家族も疲れてきてしまうので、ときには「忘れ」、裁量労働だからこそ、オンとオフをちゃんと意識しなければと思っています。また、夫や子どもはもちろん、それぞれの両親、姉家族、近所の方々やベビーシッターさんなど、本当に色々な方々に助けられています。ずっと感謝の気持ちを忘れず、自分のやりたいことを諦めることなくやっていけたら、と思います。スリランカでは、内戦後、コミュニティの社会構造や関係性が大きく変わっている地域があります。そういう場所も含めて、スリランカのことをさらに深く知って、世の中に発信していきたいです。

編集後記

ずいぶん寒くなり、セーターを着ようか迷う日も出てきました。セーターのお庭はすっかり秋の色、新入りの花たちがとても綺麗です。お近くに来られた際は、ぜひお立ち寄りください。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>